

一八八三年十二月十九日(水)

ベルの木と五聖樹パンチャパテイの杜の下で聖ラーマクリシユナと校長のみ

タクール、聖ラーマクリシユナは、ベル(ビルヴァ)の樹の近くでモニと話をしている。時間はだいたい午前九時ころ。

今日は水曜日、一八八三年十二月十九日、黒分五日目。

このベル(ビルヴァ)の樹の下はタクールが修行をなさった場所である。非常に静かなところだ。北は高い塀で、その向こうに政府の火薬庫がある。西には松林ジャウトラがあつて、終日、サーツサーツと幽玄な音をたてている。その向こうが聖なる流れガンガーだ。南には五聖樹パンチャパテイの杜が見える。四方が木ばかりで、ここからは寺院の建物は少しも見えない。

聖ラーマクリシユナ「(モニに向かつて)だが、女と金を捨てないかぎり、どうにもならないよ」

モニ「なぜですか? ヴァシシユタデムア様はラーマにこう言いました——『ラーマ、この世がもし神の外にあるとでも言うのなら世をお捨てなさい』と」

聖ラーマクリシユナ「ハハハ。そりゃ、ラーヴァナを滅ぼすためだよ! そのためにラーマは世間でお暮らしになつて、結婚もなすつた」

モニは言葉を失い、丸太棒のように突っ立っていた。

タクール、聖ラーマクリシュナはこうおっしゃってから、部屋に戻られるために五聖樹パンチャパテイの杜の方角に向かつて歩き出された。

〔無形の神（非人格神<sup>II</sup> 梵<sup>ブラフマン</sup>）を覚る修行はたいそう難しい〕

タクール、聖ラーマクリシュナは、五聖樹パンチャパテイの杜の下でモニと話をしていた。時間は十時近く。

モニ「無形の神を覚る修行をして、成功の見込みはあるでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「ないわけではないだろう？ あのだは大変に難しいかね。<sup>〔原典註〕</sup>古代のリシたちは、いろいろな苦行をたくさんしてそれを悟って——ブラフマンの本質を体得したものだ。リシたちはどんなに厳しい修行をしたことか——。自分の小屋から朝早く出かけていって一日中苦行をして、暗くなってから戻ってきた。それからホンの少し、木の実や草の根を食べただけだった。

この修行では、ホンのわずかでも世俗の欲があつては成功しない。色や形、味、匂い、感触、こういった対象ものから心が完全に離れていなければならぬ。そうすれば心が純粹になる。その純粹な心が、アートマンそのものなんだ。心から、女と金のことがすっかりなくなるんだ——。

〔原典註〕 至上者の非人格的な相<sup>すがた</sup> 即ち非顕現の真理に 心をよせる者たちの進歩は甚だ困難である

肉体をもつ者たちにとっては その道は常に險あやうしく様々な困難を伴う —— ギーター 12・5 ——

心が純粹になると、も一つ別な境地になる。神のみが行動者で自分は何一つしていない。という境地だ。自分がしなければ、私がいなければなどという知覚き覚はなくなる——喜びにおいても、悲しみにおいても。

ある僧院の坊さんを、悪い奴がなぐりつけた。坊さんは気絶してしまった。気がついて誰かに、『今あなたに牛乳を飲ませているのは誰ですか?』と聞かれたとき、彼はこう答えたよ——『私をなぐったお方が、私に牛乳を飲ませていらつしやる』と」

モニ「はい、その話は存じております」

〔ステイク・サマーディ 止定三昧とウンマナ三昧〕

聖ラーマクリシュナ「ただ知っているだけじゃだめだよ。身につけなけりゃ。

世俗のことを考えている心は三昧に入れない。

俗心を完全に捨て切れば止定三昧ステイク・サマーディになれる。わたしは止定三昧で肉体を捨てようと思えば捨てられるが、信仰と信者を持ってまだ少しこの世に留まりたいという気持ちがあるのでね。だからちよつと、体の方に心が向いている。

それからもう一つ、ウンマナ三昧サマーディというのがある。散っている心が急に集中するんだ。あれはお前もわかっているだろう?」(訳註——一八八三年十二月某日にタクルールからウンマナ三昧サマーディの説明があった)

モニ「はい」

聖ラーマクリシュナ「散っている心が急に集中する。この三昧は長くは続かない。俗心が入ってき  
て壊してしまう——ヨーギーのヨーガ(統一)が崩れてしまう。

郷里くりにの方では壁穴のなかにマンガースが住んでいる。穴にいたいそう気持ちいいのだ。ところが、誰かが尻尾シツポに煉瓦を結びつける。そうすると煉瓦の重みで穴からズリ出てくる。穴の中の気持ちいい状態に戻ろうとして何度も努力するんだが、またまた重みに耐えかねてズリ出てくる。俗心もこんなふうには、ヨーギーをヨーガからズリ落とす。

世間の人たちも、時たま三昧の境地になることはあるだろう。太陽が昇れば蓮の花はひらくが、太陽が雲にかくれると、また蓮の花はつぼんでしまう。俗心が雲だよ」

聖ラーマクリシュナ、モニと共に——智慧と信仰を両方を得ることは不可能か？

モニ「修行によって、智慧と信仰の両方を得ることはできないものでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「信仰を固く持ち続ければ二つとも成就する。必要とあれば、あの御方がブラフマン智を授けて下さる。非常に霊格の高い人は、いちどに両方とも成就することもできる。

チャイタニヤチャイタニヤ様のような神イシジュウワ、コイテの分身はそれができる。普通の個霊は話がちがうよ。

光には五種類ある。ランプの光、いろいろな火の光、月の光、太陽の光、それに月と太陽がいつしよになった光。——信仰は月、智慧は太陽だ。時折、太陽が沈みきらないうちに、月の昇るのが見える。神アツァクテラの化身たちの場合には、信の月と智の太陽が同時に見られるんだよ。

そう希望しただけで、誰でもが信仰と智慧の両方を身につけることができると思うかい？ 容器うつわによるんだ。竹にも、中の空洞がうんと大きいのと、バカに狭いものがある。神の本質を理解することが、どんな器でもできるというものじゃない。一シア（リットル）のツポに二シアの牛乳は入れられないだろう」

モニ「でも、あの御方のお恵みがあれば？ あの御方がお恵み下されば、ラクダも針の穴を通ることができません」

聖ラーマクリシュナ「でも、神の恵みは何のワケもなく授かるものかい？ 乞食が一パイサ銅貨を物乞いすれば、お前も恵んでやるだろうさ。でも、初めっから汽車賃を恵んでくれといったらどうするね！」

モニは声もなく突つ立っていた。聖ラーマクリシュナも黙っておられる。と、突然、こうおっしゃった——「そうだ、そうだ。どんな器の人でもあの御方のお恵みがあればできる。二つとも手に入れることができる」

モニは師を礼拝フエームしてからベルタラの木の方に行った。

時間は正午を回った。モニがまだ戻らないので、聖ラーマクリシュナはベルの木の方角の様子を見に行かれる。すると五聖樹パンチャパテイの杜トのところで、モニが静座用の敷物と水の入った壺つぼをもって戻ってくるに出合った。モニは額ぬかずいてタクールを拝した。

聖ラーマクリシュナ「モニに向かつて）お前を探しにきたんだよ。こんなに遅くなくても戻らな

いから、壁をよじのぼって逃げて行つたかと思つた！ お前の目を見ていて、ナラヤン・シャーストリーのように逃げ出したんじゃないかと思つたよ。それから又、あとで考えた——いや、逃げないだろう。あれはよくものを考えて行動する男だから」とね」（訳註——ナラヤン・シャーストリーのことは一八八四年七月三日にタカールが回想している）

### 聖ラーマクリシュナ、モニはじめ信者たちと共に

夜になつて、聖ラーマクリシュナは再びモニと話をしていらつしやる。ラカール、ラトウ、ハリシュたちもいた。

聖ラーマクリシュナはモニに向かつておつしやる——

「ときに、クリシュナの活動について哲学的な説明をする人がいるが、お前はどう思うかい？」

モニ「いろいろな考え方がありますが、どうということもないでしょう。ビーシュマ様の話をあなた様はなさいましたが、矢の床で死ぬときに、『どうして泣くかというのか？ 苦しいからではない。ナーラーヤナの化身がアルジュナの御者になつていながらもかわらず、パードゥ一族にふりかかる災厄のかくも多いのを見るにつけ、神の活動について、自分は何も理解していないのを慚愧して泣いているのだ』と申しました。

それから、ハヌマーンの話もして下さいました——『私は日や月や星まわりのことも何も知らぬ。ただ、ラーマひとりを想っているだけだ』と。

それに、こうもおっしゃってましたね——『ブラフマンとシャクティのほかには、何一つ存在しない』と。それから、こうおっしゃいました——『ブラフマン智を得たら——その二つが一つだと悟ると、二のない一である』と」

聖ラーマクリシュナ「はい、その通りだ。トゲだらけのイバラ道を行こうと、楽な大通りを行こうと、目的地に達すればいいんだよ。

いろんな意見があるよ、まったく。ナンクタ(トーター・プリー)が言っていたが、意見の相違のために奉仕を受けられなかったと。ある場所で修行者たちの大饗宴があつた。いろんな宗派の連中が招待された。それぞれが自分たちの宗派を一番先にしてくれ、と言ひ張つて順番が決められない。とうとう皆、出て行つてしまった！ ごちそうは売春婦たちに食べさせたとさ！」

モニ「トーター・プリーはえらい人でございますね！」

聖ラーマクリシュナ「ハズラーはごく当たり前な人だと言つているがね。旦那でもなく、どこで仕事をしてもなく——。誰でもが自分の時計は正確だと思つている。

ごらん、ナラヤン・シャーストリーの強い離欲を。たいへんな学者で、妻を捨てて出家してしまつた。心からすつかり女と金を捨てればヨーガに成功する。ヨーギーの特徴がはつきり顕れている人たちもいるよ。

お前に六チャクラの話をしてやろうね。ヨーギーたちは六チャクラを通り抜けて、あの御方のお恵みによつて見神するんだよ。この六チャクラについて何か聞いたことがあるかい？」

モニ「ヴェーダーンタで言う七住地フシミのことでございましょう」

聖ラーマクリシュナ「ヴェーダーンタじゃなく、ヴェーダの教えだ。六つのチャクラはどんなものかわかるかい？ 精妙スクリシュマ体幽体のなかにこの六つの蓮があるんだよ。ヨーギーたちには見えるんだ。蠟細工ロウジウの木の果実みと葉はのようなものだ」

モニ「お言葉の通り、ヨーギーたちには見えるのでしょね。ある本に書いてありましたが、一種のメガネがあつて、それを通してみると極く小さなものが大きく見えるのだそうです。そんなふうにヨーガを通じて、そういう精妙体の蓮が見えるのだと思います」

聖ラーマクリシュナは五聖樹パンチャパテイの杜チの小屋ヤに泊まるようにとおっしゃった。モニはその部屋で夜を過ごした。

一八八三年十二月二十日（木）

朝方、その部屋でモニはひとりで歌をうたっている――

ガウルよ、修行も礼拝も

私にとつては及びもつかぬ

貧マキしく 賤イヤしい 愚オロかな この身ワタシ



あなたの一触れで 清浄めておくれ

あなたの御足に追いつきたいと

思えど、思えど まだまだ遠い

毎日、毎日 慕えど、追えど

私はガウルにまだ会えぬ

ふと窓の方を見ると、何と聖ラーマクリシユナが立っていらつしやる。貧しく賤しい愚かなこの身、あなたの一触れで、清めておくれ。このことは聞いて、その御方は目を涙でいっぱいになさつた。

彼は再び歌つた――

われ赤土で染めし衣をまとい

ほら貝の耳輪をつけて――

われ女行者の装いして行く

かのつれなきハリいます国へ――

聖ラーマクリシユナといっしよにラカールもこの辺を散歩していた。

一八八三年十二月二十一日（金）

金曜日、十二月二十一日の朝方、聖ラーマクリシュナはベルの木のところでモニと二人きりで話をしておられる。修行上の様々な秘密の話や、女と金を捨てる話である。それから、時には心<sup>シ</sup>がグル（靈性の教師）になる、という話もして下さった。

食事の後、五聖樹<sup>パンチャバタイ</sup>の杜に行つた——タクールはとてもよく似合う黄色の衣を着て！ 五聖樹の杜には二、三人のヴィシシュヌ派の聖人<sup>ババジ</sup>が来ていた。その中の一人はパウル（吟遊詩人）だった。タクールは彼らにおっしゃる。——「お前たちのそのフンドシのひもは、そりゃどういう意味だ？ フンドシのひものような束縛しかない、そういうことだろう？」

午後、ナーナク派の修行者が来た。ハリシユとラカールがいた。この修行者は無形の神を信奉している。タクールは彼に、「有形の神をも想つてみるように——」とおっしゃった。

聖ラーマクリシュナはこの修行者におっしゃる——「深く沈みなさい。上の方で泳いでいたんでは海底の宝玉は手に入らない。そして、神は無形であることは確かだが、また有形（人格神）でもあるのだ。有形の神を想ふことによつて信仰がはやく身につく。それから又、無形の神を想ふこともできるのだ。手紙を読んでから、その手紙を捨てるようなものだ。その後で書いてあつた用事をするんだよ」